

南信州新聞

2015. 9. 11

日本の多様性を考える

法政大 飯伊研修の成果を発表

法政大学国際文化部（東京都）で学ぶ中国と韓国の留学生3人が9日、飯田市公民館で飯田下伊那地域における研修成果を発表した。満州移民や残留孤児、多民族共生などそれぞれのテーマごとに報告し、参加した受け入れ先関係者や一般ら約20人は注意深く耳を傾けた。

ことし4年目を迎えた同大学留学生の研修は、飯田下伊那地域を例に日本の多様性を考えることが狙い。3日から7泊8日の日程で

飯田下伊那を訪れ、天龍村の平岡ダム、飯田市の川本喜八郎人形美術館やデイサービス施設、阿智村の満蒙開拓平和記念館のほか、松川町にも訪れ、地域の歴史や文化、民俗、自然などについて学んだ。

この日発表したのは題など学んできた成果を披露。残留孤児二世、三世にインタビュ

民の歴史と移民による残留孤児および一世、

三世の問題」のテーマで発表した中国出身の袁琳琳さん（25）は、

ソ連軍の満州侵攻で始まった逃避行と収容所の年齢によって状況は大きく異なると思う。ゼロから日本語を習い始めた人は、一世と同じように言葉や文化の

一した結果「中国帰國者であることを隠し、最初はなかなか日本社会になじめなかつたことが分かった」と語った。

まとめでは「帰国時

壁に直面し、一方で小

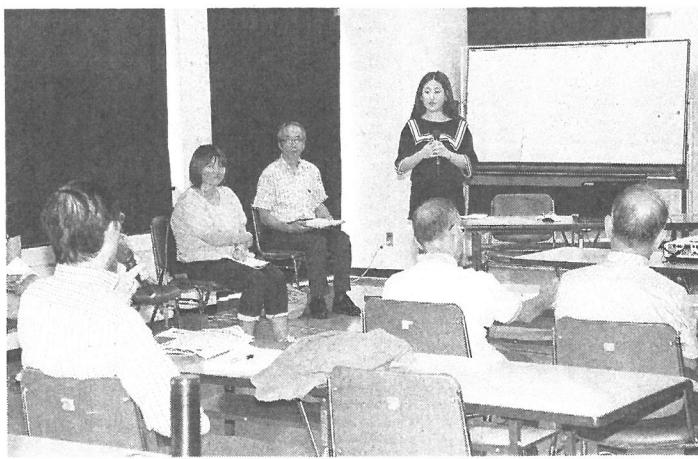
う」と指摘した上で、「親子なのに会話が成

立しない状況もあり、

一世とその孫はまつた

く話せなくなってしまった」と結論付けた。

袁さんは「残留孤児はほとんどが70歳以上で、言葉の壁で高齢者施設になじめない。通訳代わりとなる一世や三世が学校を休みがちになるという現実もある」とし、「周囲の帰国者と互いに助け合う協力が必要。その点で飯田市立病院に中国語の通訳がいてすごいと思った」と話した。飯田下伊那についても触れ「自然豊かで、人と人が強く結ばれる絆を感じた。松川町のホオズキはとてもおいしく、いい思い出になった」と感想を述べた。



法政大学留学生による飯伊研修成果発表会

きょうの紙面

11	10	8	6	3
19	7	9	7	19日に焼來肉ロツクフエス
今宮郊戸八幡宮秋季例大祭鳩ヶ嶺八幡宮秋季祭典				
法政大留学生が飯伊研修の成果発表				